

郷村建設運動における梁漱溟の道

小林善文

【要約】 梁漱溟は、一九三〇年代の初頭、山東省鄒平県を中心とした郷村建設運動を指導した。この運動は破産に瀕した中国を救済する有力な手段とされ、郷村内の有徳者が平和的な手段によって、生活改善事業の推進、農業技術の改良、合作社の設立などをおこない、郷村民全体の富裕化をめざすというものである。それは梁の信念であり独自の構想であった。この郷村の秩序は団体を結成する個々人の倫理によって支えられ、法律や多数決原理によらないものであり、人々の自主性を尊重しようとするものである。またこれらの郷村は中国の工業化を導き、消費のために生産するが、それが個人の営利を求める資本主義であってはならないとする。しかし現実には、合作社の事業などで、郷村は外部の資本を導入し、省や県の政府の命令で郷民に軍事訓練をおこなったが、これは梁の意図とは異なる事態となった。また郷民の教化機関としてかれが期待していた村学と郷学は、有効に機能せず、その理論と現実の乖離は明らかとなった。

史林 八一巻二号 一九九八年三月

はじめに

梁漱溟（一八九三―一九八八）は、中国の二〇世紀を代表する思想家であり、社会実践家の一人であった。その名は煥鼎、字は寿銘、ペンネームとして寿民、瘦民を用い、二〇歳より漱溟を名のった^①。梁の若き日の西洋思想から仏教を経て儒家思想に転じた思想的遍歴、北京大学の教職を捨てて従事した郷村建設運動、日中戦争が本格化するなかでの第三勢力の指導者としての活躍、解放後のかれに対する大規模な批判と毛沢東との関係などの諸々の問題に関しては、すでに数多くの研究成果が内外で公刊されてきた。本稿が取り扱う梁と郷村建設運動の問題についても、かれの理論と実践に対する主と

して批判的見地からの優れた研究成果が生み出されている。^②しかし、管見の限りでは、それらは外部の評価に基づく批判が中心で、梁自身の著作を丹念にあとづけ、その論理に含まれる矛盾や限界などを、現実に照らして明らかにする試みに重点がおかれることはなかった。『梁漱溟全集』^③が完成した今日、改めて梁の歩んだ道をかれの文章によってたどりの論理の特質について論証することが可能になったといえよう。

梁の実践は、一九三〇年代、世界恐慌の影響下に破産に瀕した中国の郷村、国共の対立の深刻化、日本の満州事変以降本格化する中国侵略という社会的、政治的情况の下に進められた。その実践は、かれが若き日から培ってきた信念によりつつ、他の郷村建設諸団体の実践に対する批判の上に展開された。しかし、はたして梁の郷村建設の理論と実践は所期の成果をあげることができたであろうか。まず梁の郷村建設構想の特色を明らかにするとともに、その理論の具体化にあたって、かれがどのような方法を探ろうとしたのか、その独自性を明らかにする。あわせて第三勢力の代表的存在たる梁の活動の特色を探ることも視野に入れて、山東郷村建設研究院の鄒平県における実験の結果を中心に考察したい。

① 李淵庭・閻秉華編『梁漱溟先生年譜』広西師範大学出版社、一九九一年、一頁。

② 新保教子「梁漱溟と郷村建設運動——山東省鄒平県における実践を中心として——」『日本の教育史学、教育史学会紀要』第二八号、一九八五年、は梁に対する聞き取り調査もふまえた総合的な研究である。また家近亮子「梁漱溟における郷村建設理論の成立過程」（山田辰雄編『近代中国人物研究』慶應義塾大学地域研究センター、一九八八

年）には、要を得た研究史の紹介があり、研究史の動向については、この論文を参照されたい。なお梁の再評価への動きに関しては、河田梯一「伝統から近代への模索——梁漱溟と毛沢東——」（岩波講座『現代中国』第四巻「歴史と現代化」一九八九年）参照。
③ 中国文化書院学術委員会編『梁漱溟全集』山東人民出版社、一九八九—一九九三年（全八巻）。以下「全集」と略し、巻数は数字のみで示す。また「梁」はとくに記さない場合は「梁漱溟」の略である。

一 梁漱溟の郷村建設構想の特色

世界恐慌の影響が及んでいた一九三二—一九三五年の中国全土における水害・旱害の損失は一〇〇億元に近く、平均一

戸当たりの損失は一五〇元前後となり、三二―三六年に全国で災害により死亡した者は六九八万八千人以上となつて、「救済農村」「復興農村」の声がわき起こつていた。^① 梁漱溟は、郷村建設運動をここ数年來の郷村破壊によつて惹起された郷村を救済する運動である、と述べ、それを「郷村自救運動」^②と規定する。しかもそれは「中国社会全体の建設という意味であり、一種の建国運動」^③と位置づける。さらに「有形の事實は郷村、無形の道理は理性」^④と称し、理性を重視するとともに「新しい文化を創造して、古い農村を救済する」^⑤として、文化面も重視する建設をめざすのである。こうした理性や文化を重んじる郷村改革の主体はあくまでも「郷村人」であり、郷村人が自覚をもつて郷村人の組織を作ることが基本とされていた。^⑥ そのため外部より郷村に入り、郷村建設の指導的役割を果たすべき人々は、終始在野の地位を守り、武力を用いず、政権を操ることもしない、と梁はいう。^⑦ かれは、法律上何らかの地位を得、法律によつて与えられた権力をもつて政治にかかわることにはない、と繰り返して述べている。かれは、農民の自覚を啓発して「一種の農民運動」^⑧たらしめんと説きつつ、さらに郷村建設運動が必ず終始その社会運動の立場を保持し、国家あるいは地方の一種の行政を担わなければ、その使命を完成できない、という。ただし、梁は一方において、政権に接近してそれを使用することを妨げないとし、かれらと政権との間の一定の比例平衡という原則も打ち出しており、^⑨ 自らの方針の将来における変更の可能性について含みをもたせているのである。

梁漱溟がこの郷村組織の原型を宋代の《呂氏郷約》に求めたことは、早くから指摘されているところであるが、^⑩ こうした《郷約》の意に基づき、充分に中国古人の理性精神を發揮し、倫理情誼により社会関係を調整し、もつて団体を構成すべし、^⑪ とする。そのためには郷村建設は「礼俗の路」^⑫を歩むべきであつて、「法律の路」に帰ることはできず、中国の問題とはただ新礼俗をいかに創造し開拓するかであつて、礼俗を維持することから再び法律維持の問題に変わることではない、^⑬ と述べ、法律に拠る郷村秩序の維持には警戒感をもっている。

梁漱溟は、一九三二―三五年の間、山東郷村建設研究院における学生に対する朝会において講演を続けた。そこでかれ

の描いた理想の社会は、

第一に、人と人に生存競争がなく、人と人が手を合わせて自然を支配し、自然を利用する。第二に、社会が人生の向上を助け、すべてを教育の意義に合わせ、一個の完全に教育化した環境を形成し、人に向学の誠を説き、自らを高めるために力を集中させる。その結果、また学術面での發明や文化の進歩によって、社会が効果をあげることになる。^⑮

というものであった。ここでは科学や教育に関する内容が豊かに盛り込まれる一方で、生存競争は否定されている。梁はまた「中国には以前五倫の説があったが、われわれは今一倫を再びつけ加えることができ、それは団体の個人に対する、個人の団体に対する、かれこれが互いに尊重し、互いに義務をもつ」という形の新たな倫理を説く。そこで梁の思想の根幹にかかわる団体観について考えてみたい。

欧米各国はいつでも人々を結合し、団体の力によって経済上の競争をしている。このような時にわれわれ中国はなお散漫漫漫で、団体なく、組織なく、おのおのがあい顧みず、あい謀らず、それでは人と競争する方法は絶対になく、生きかえることは考えられない。^⑯と梁漱溟は中国の国家存亡に対する危機感を表明する。儒教が最重要の位置を占めてきた伝統中国では、個人道徳である倫理、孝悌、貞節、忠義などを講求し、団体構成員の団体に対する関係を講求することはなく、まさにそれは「非団体の生活」であり「反団体の習慣」である。^⑰このような認識をもつかれば、団体生活の習慣の養成という大きな目標を掲げていくことになる。団体を組織するに当たっては、小範囲の郷村より着手しなければならない。その理由として、梁は三つの要素をあげている。^⑱

- (1) 利害が近く、すべての問題を眼前に見やすく、注意を引きかわりやすい。
- (2) 主張するところの活動が、影響を与え効力を生みやすい。
- (3) 人事を熟悉して情誼に通じやすく、合作しやすい。

また小さな団体は多くのものが情誼により運用できるが、大きな団体はなお法律を必要としており、法律の運用される社

会を、極力避けたかったからである。梁は、今後の団体生活は「中国の過去の情義礼俗の精神に接続すべきである」という。しかし、「団体と個人の間の一倫」を追加すべきであるという以上、単なる復古主義の精神とはいえないのである。^{②1}

梁漱溟は、人は辛亥革命の後、袁世凱が国会を解散し、北洋軍閥が約法を破壊したことを恨むが、その原因は、袁世凱個人にも少数の北洋軍閥にもなく、多数の民衆にそのような政治習慣がなく、その政治制度を運用できなかったことにある。^{②2}とする。また「中国の社会秩序は本来礼讓より生み出されていたが、今やあたかも相反する競争の武闘へと引き込まれ、原来の礼を失い、矛盾し衝突して、秩序なく、どうしてさらに散じ乱れないでおられようか」と慨嘆する。こうした現状において「散じかつ乱れた中国社会は、自ら西洋式の党団を生み出すことはできない」と認識する梁は、中国においては、西洋型の政党を組織し、選挙や三権分立の方法は採ることができない、と考える。しかし、かれは西洋型の政治システムをすべて否定するわけではない。かれは「人治の多数政治」を主張しているが、それは「皆が個人を承認し、一個人に服従すること」であるとし、レーニンやスターリン、さらにムソソリーニを評価する。またかれは「多数の衆人が考えを出して賢者が従う」ということは、理論上はなほだ欠けるところがある^{②3}」として本来の意味の多数決原理は否定する。ただし「三権分立は役に立たないので廃止しなければならないが、チェックとバランスはなお民主主義の重要点である」として、システムの一部は是認するのである。しかし、かれのいう「チェックとバランス」が現実の鄉村政治のなかで保障されるシステムは、ついに表面的には現れてこなかった。

梁漱溟は、鄉村を分化し、鄉村内で闘争する運動に反対し、また「農民の自発的な運動」のごとき説法は中国問題の実際にあわない、^{②4}と考える。すでに梁は、農民を啓発して農民組織を作るべきと説いているのであるから、ここでは鄉村内部に対立をもたらす「農民の自発的な運動」は否定するということになる。そこでは「専門知識学問をもち頭脳と眼識をもつ人が皆を指導し、常に皆を自覚めさせ、皆に代わって考えを出し、皆の了解と承認を待って後再びおこなう」として^{②5}下郷した知識分子が、鄉村住民の同意のもとに指導をおこなうという基本線が掲げられているのである。しかし、鄉村住

民があくまでも受け身であるならば改進黨は進まないであろう。団体を結成するに当たっては、極力郷村が主体となり、その構成員が自主的に参加することが必要で、「団体のなかの多数の分子が主動作用をもつものは、一種の進歩的組織とみなすことができる」というように、かれは賢者の指導下に協調を旨とするという限定付きながら郷村住民の自主的な行動力を喚起することを主張しているのである。

梁漱溟は「個人を尊重し、相談してことをおこなう」ことの必要性を説き、「個人を尊重すること」はすでに「自由・平等」の意を含むことが少なくなく、「相談してことをおこなう」こともまた「自由・平等」より来ている、という。しかしかれは、個人主義が集団生活發達後の産物であり、中国人には集団生活が欠乏しているから、個人主義はないととらえる。またこれと関連する「自私」の問題については、「中国人の自私は後天的なものであり、社会組織の影響によるもの」と理解している。^②「法律の路、權利觀念、個人本位の道は歩むことができない」という梁の言葉は、散砂の如くバラバラな中国人が法律や權利を盾に個別の利益追求の走ることを、何よりも危惧していることを示している。そのため、かれの構想する運動においては、知識分子と民衆との間の連携と、それによって成立する民衆組織の強靱な力に期待を寄せることになるのである。「郷村の自治がまさに樹立されて、中国の政治は基礎ができる。ただ郷村一般の文化がよく高められて、中国社会に進歩がある」という梁の郷村本位主義とでもいうべき表現にみられる郷村の自治は、民衆自身が担うべきものである。その一方で、農民負担を増加させ、土豪劣紳の權威を助成するような地方自治は苛政に他ならない、とも述べている。

梁漱溟の膨大な著作のなかの断片的な表現を取り上げてみると、そこには相互に矛盾すると思われる部分が少なからず存在する。しかし、かれの基本理念は、「賢者」の手による礼讓に支えられた平和な郷村秩序を作り上げることにあつた。また儒教的世界観が「非団体の生活」や「反団体の習慣」を養成してきたととらえ、「君臣の一倫」に代わるべき団体と個人の関係の一倫を説き、小さな規模での団体の組織化を説いている。その小さく組織化された郷村の自治こそが、中国

社会の進歩の原動力になると梁は考えているのである。

郷村の自立を考える場合、帝国主義勢力の進出がもたらす影響を軽視することはできない。梁漱溟は、この問題をどのようにとらえたのか。近百年のうち、帝国主義の侵略は、もとより直接間接いずれも郷村を破壊してきた^⑤。かれは、このように認識しつつ、大声で疾呼して、帝国主義打倒を標榜しても現実には実行できないことであり、はたして実行しようとするは、かえってスローガンを標榜すべきではない。これをもってスローガンとして政権樹立を謀っても、おそらくは国際環境が許さないとある^⑥。梁は、さらに民衆をして、郷村を離れ、鋤を捨てて帝国主義の打倒に向かわせても、帝国主義を打倒できず、農民自身が飢えることを恐れる、^⑦という。この主張を裏付ける事実として、かれは一九二七年の武漢における反帝闘争を取り上げる。この時、輪船は動かず、工場は閉じられ、洋行も門を閉じ、外国人と関係のある鉱業も休業した。これは「帝国主義の退却」であるが、輪船が停船すれば、洋貨は入らず、日用品は直ちに欠乏し、とくに石油がなければ、武漢三鎮はすぐに暗黒世界となる。工場が止まれば労働者は失業して、落ち着くところがなく、外貨が入ってこなければ海関での税収がなくなる。炭坑が止まれば汽車は走ることができない^⑧。かれはこのように反帝闘争がもたらす表面的な不利益のみを取り上げて、とくに武力反抗の無意味さを主張するのである。

それだけにとどまらず、梁は帝国主義の侵略は農村の再建にとってプラスになるという見方をする。

帝国主義が不平等条約の種々の経済的手段をもって、中国の競争力を圧迫し、中国の工商業の興起を杜絶させ、中国をして資本主義化を免れさせるのは、ほんとうに非常に慶ばしいことであって、私は天地に感謝したい^⑨と思う。

と侵略のもたらす結果を賛美するだけでなく、

不平等条約は工業にとってはもちろん莫大な困難であるが、しかし農業上かえって利が得られ、不平等条約はほとんど農業を発達させる保障になっているとわれわれは考える。けだし不平等条約の束縛がなければ、われわれの工業は自然に発達でき、工業が発達すれば労働力と資本は都市に集中し、農村が圧迫をうけることになり、農業は発展の可能性がなくなるので、不平等条約は農業

の援護者になるといえるのである。^④

とも述べている。農村と都市との対立を主要なものとし、民族産業の育成という方向は打ち出さず、逆に帝国主義の及ぼす影響を副次的なものとし、梁の独特の論法が表現されているといえよう。少なくとも表面的には、帝国主義の進出の影響が都市も農村も共通して巻き込んでいくという認識はみられないのである。しかし、かれは帝国主義反対の姿勢を全くもたなかったわけではない。外国商品に対するボイコットは団体によらなければならないと説き、『大公報』による数次の抗日募捐での七〇万円の募金の成果を高く評価し、帝国主義に反抗するために経済的基礎を確立することが必要であることや、抵抗するための文化面での努力を説いている。したがって、梁は帝国主義の進出に伴う種々の弊害よりも、都市工業の発展によって郷村社会が窮地に陥ることの方がより深刻な問題と認識していたと考えられる。

梁漱溟は、郷村建設が当面するもう一つの敵対勢力として共産党を考えていた。国民革命軍による北伐は、共産党勢力に頼って成功したが、それは「兩湖、広東、江西その他各省の焚殺の惨をもたらした」と批判する。また共産党は明らかに農村内部の闘争を提唱し、農村をひとまとまりのものとして、そのため一種の分化の工作をして、郷村内部自体を混乱させている、^⑤という。その根本的な原因として梁は「共産党の錯誤は、なお外国の階級社会における農民運動の旧套を踏襲し、中国社会を認識しないことにある」ととらえている。結果として「共産党の引き起こした剿共の軍事（蒋介石の圍剿——引用者註）は、年月が久しく、規模が大きくなり、国力を損耗し、日禍を招致し、今日追及すると、また責任を逃れることはできない」とまで述べ、当時の社会的混乱のすべての責任を共産党に帰している。その一方で、梁は自ら構想し、指導する農民運動が、「実に中国農民運動の正規となつて、共産党に代わることができる」という自負をみせている。^⑥

しかし、梁漱溟は、ソ連邦や共産主義に対して、一方的に否定する姿勢をとっていたわけではない。かれは、幸徳秋水の『社会主義神髓』（張溥泉訳）を読んで、「社会におけるすべての罪悪の源泉は等しく財産の私有にある」ということを理解し、ソ連に関しても生産と貿易を国家が管理することによって他のすべての国家を圧倒している、と評価する。また

中国の歩むべき路は、郷村の組織化であり、「散」より「合」へと向かうことであると、それは共産主義と全く異なっているわけではなく、「この路の向かうところは明らかに社会主義の一種であつて、ロシアと比較すればただ方法の違いのみである。ロシアの方法は農民を散より合とさせるが、強制圧迫の力がたいへん大きくたいへん凶であるから」と述べ、社会主義の体制のなかでも評価すべきところは評価する姿勢をみせているのである。とはいへ、かれは「個人主義と社会主義は、すべてわれわれ中国には適していない」という姿勢を崩すことはない。とくに土地問題に関しては、「農民の土地はすなわちかれの生命活動のひとつの適当な刺激である」という立場から土地の没収に反対し、こうした政策を進めたソ連の戦時共産主義を批判しているのである。^⑮

- ① 魯振祥「三十年代郷村建設運動的初歩考察」『政治学研究』一九八七年の四（復印報刊資料『中国現代史』一九八七—八所収）。
- ② 梁「郷村建設理論」『全集』二—一四九頁。
- ③ 同前、一五三頁。
- ④ 同前、一六一頁。
- ⑤ 同前、三二〇頁。
- ⑥ 梁「郷村建設大意」『全集』一—六一—五頁。
- ⑦ 梁「郷農学校の辦法及其意義」『全集』五—三三四頁。
- ⑧ 梁「答郷村建設批判」『全集』二—一六三〇頁。
- ⑨ 同註②、五一九頁。
- ⑩ 梁「広西国民基礎教育与郷村建設運動」『全集』五—六三三—六三六頁。梁はまた「いったん実験区が行政化すれば、工作人員は公務員となつて、少しも希望がなくなる」（『郷村建設運動中的三大問題』『全集』五—六三三頁）と述べている。
- ⑪ 梁「我們的兩大難題」『全集』二—五八四頁。
- ⑫ 小野川秀美「梁漱溟に於ける郷村建設論の成立」『人文科学』二—二、一九四八年。
- ⑬ 同註②、四二六頁。
- ⑭ 梁「中国之地方自治問題」『全集』五—三三〇頁。
- ⑮ 梁「朝話」『全集』二—一九六頁。
- ⑯ 梁「我的一段心事」『全集』五—五三七頁。
- ⑰ 同註⑥、六三九頁。
- ⑱ 同註⑭、三二二、三二九頁。
- ⑲ 梁「請辦郷治講習所建議書」『全集』四—八二九頁。
- ⑳ 梁「答湖北政務研究会參觀團問」『全集』五—六八一頁。
- ㉑ 同註⑭、三二五頁。
- ㉒ 同註⑭、五三三頁。
- ㉓ 同前、五三六頁。
- ㉔ 同註②、四七六頁。
- ㉕ 梁「欧州独裁制之趨勢与我們人治的多数政治」『全集』五—六六七—六六八頁。ただし、梁は「私がひそかに政治上のファシズムや共産党のやり方に向かうと考えることなかれ。私はこの二つの道はいずれ

も間違っていると思う」と述べている（「解決中國經濟問題之特殊困難」【全集】五一四二頁）。

- 26 梁「政教合一」【全集】五一六七六―六七七頁。
- 27 同前、六七八頁。
- 28 同註⑧、五九七―五九八頁。
- 29 同註⑥、七一〇頁。
- 30 梁「中國民衆の組織問題」【全集】五一七九〇頁。
- 31 梁「村学的做法」【全集】五一七四三頁。
- 32 梁「郷村工作中一個待研究待実験の問題」【全集】五一七五九頁。
- 33 同註②、三八九頁。
- 34 梁「山東郷村建設研究院設立旨趣及辦法概要」【全集】五一二二五頁。
- 35 梁「敢告今之言地方自治者」【全集】五一二四四頁。
- 36 同註②、一五〇頁。
- 37 同註⑧、六三五頁。
- 38 梁「民衆教育何以能救中国？」【全集】五一四八三頁。
- 39 梁「郷村建設運動綱領講述」【全集】五一九五―九五二頁。

二 郷村建設理論の具体化をめぐる

梁漱溟は、「東西文化及其哲学」のなかで、西方文化の三つの特異な色彩として、自然を征服する多彩さ、科学的方法の多彩さ、デモクラシーの多彩さをあげ、^① こうした西方文化に中国が出会わなければ、千年経過しようとも、輪船などの発明や科学的方法、さらにはデモクラシーの精神を生み出すことはなかった、^② と述べる。現実には、中国がその西方文化に出会い、工業化という過程に入ることは不可避となっていた。梁は、物質文明に反対し、工業化に反対していると誤解さ

- 40 同註②、四九九頁。
- 41 梁「促興農業的辦法」【全集】五十六四七頁。
- 42 同註⑥、六二八頁。
- 43 同註⑮、七〇頁。
- 44 梁「建設新社会才算革命」答暗中君【全集】五一三〇頁。
- 45 同註⑳、四八三頁。
- 46 同註②、一九九頁。
- 47 同前、三二九頁。
- 48 同前、四一一頁。
- 49 梁「告山東郷村工作同人書」【全集】六一一六頁。
- 50 同註②、四〇七頁。
- 51 同前、四一三頁。
- 52 同註⑥、六三九頁。
- 53 梁「中国合作運動之路向」【全集】五十六〇八頁。
- 54 梁「中国社会構造問題」【全集】五十八五七頁。
- 55 同註②、五三七頁。

れているが、実際には、「物質生産の増加と生産技術の改善は、もともとたいへん重要であると見ている」^③のであり、「経済の進歩」によって「生活はさらに合理的になる」とみていたのである。ただし、その進むべき路は「農業が工業を引っ張り、農業と工業の適当な結合によって、郷村を本として、都市を繁栄させ、郷村・都市を自然で等しく実のある発展をさせる」という方向であり、「郷村の生産力と購買力」の漸増によって農業と工業が「合作の路を歩み、消費のために生産し、生産を社会化する過程の中で、同時に分配の社会化を完成させる」^④ことであるとした。そのためには科学技術と機器の利用によって人々を苦しい労働から解放し、社会の全員の生活を普遍的に高めることを願っているのである。^⑤しかし、日本に比べても中国は工業化の道を順調に歩んでいるわけではない。それは「政治的没有」のためであり、「日本のあのような社会の秩序、法律の保障はなく、かえって日本にはない交通のたびたびの断絶や砲火の突発的な発生がある」^⑥からであった。つまり戦火の発生で加重される政治的・社会的混乱やインフラの未整備などによって工業化が阻まれているなかで、かれは「中国民族がよく復興再起できるか否か、中国社会が繁栄進歩できるか否かは、決定的なのは中国社会が工業化できるか否かにある」とする。さらにあくまでも「郷村建設は中国工業化の唯一可能な路である」とし、郷村に支えられた中国工業製品の市場は国内に求めるべきだといっているのである。^⑦

中国の郷村は、農業生産にとって重要な土地を所有しているので、農業生産の増加によって農民の購買力が増加すれば、工業は興起することができる。ただし、中国の工業は「ただ非営利の立場に立ち、われわれ自身の原料と労力で生産をおこなうことによって、われわれ自身の需要を満足（大範圍の自給自足）させれば、一種の郷村工業として成り立つことができる」^⑧とその役割を限定するのである。「非営利」の立場は、かれが繰り返し強調しているところであり、また国内における自己完結的な生産と消費の体制もかれのめざすところであった。そのためその体制を構築する手段として、全国を地域ごとに分割してエネルギーを供給することを提言しているのである。それは「全国の石炭生産、石油生産と水力によって発電できる地方をはっきり調査し、確実に見積もり、そのうち全国を区域に分割し、統一的に分配し、次第に開発利用

して、工業上の動力をこうした区域内に供給する」という体制であった。梁漱溟は「工業資本主義の路は畸形の社会」をつくると考え、「消費のために生産」することにこだわり、「個人営利と自由競争の路」を拒否する姿勢を崩すことはしない。かれは「われわれはすでに財富を増殖する路を歩んでおり、生産上で生産資本を拡大して再生産（これはすなわち資本主義）せざるをえず」と現状を認めつつ、「絶対に他人の労働力を搾取して産業利潤を求めべきではない」と強調するのである。¹³

梁漱溟にとって完成させなければならないのは、「中国の新経済であり、社会化された経済、社会主義の経済」であり、「聯合は経済生活社会化の端であり、自給は消費のために生産する端であり、工業は農業が引つ張り、まさに資本主義より遠ざかり、社会主義に帰さねばならない」と唱えている。かれは「近代資本主義の路は、すでに過去のものとなり、人類の歴史は現在すでに反資本主義の段階に入っている」ととらえ、資本主義の発展がもたらす独占がなければ階級は存在しない、と述べている。そして、農業と工業の平均的で適宜の発展を考え、郷村と都市の均衡した自然合理的な発達を考えるのは、資本制度を覆した後のことである、と主張している。世界が独占資本主義に移行しつつある段階に、「反資本主義の段階」に入っているとすれば、かれの強引な解釈には疑問を感じざるをえないし、「商業利潤」を是認し、「産業利潤」を否定するにしても、その識別方法を明示しているわけではない。また「社会主義の経済」と称しても、具体的な経済体制構築のプランを提起しているわけではない。強いていえば、合作社の組織化を通して郷村の聯合を強化しようとしたことがあげられるくらいである。そこで、かれが農民の組織化の有力な手段と考えた合作社についての主張を取り上げたい。

梁漱溟は、土地問題はともかくとして、「貧富および搾取の二事に関しては、われわれの郷村組織および合作社が、大半を消去できる」と考え、「合作社は均富であることはできないが、かえって貧富均しからざる人々をして、経済上同様に前に向かって増進させられる」と主張している。かれは「合作社は個人を聯合して団体を組織し、団体の中で個人を廃せず、両面をいづれもち、まさにわれわれの理想とあい合している」と期待をかけ、「中国が共産主義を完成させ

ようとすればわれわれはこの道を歩むしかない」と述べている。^⑮さらに進歩的な技術を採用する必要性を唱えているが、零細な農民の土地では不可能であり、合作社を組織して経営するのがよく、そこでは知識分子が技術指導することが必要である、と説く。またかれは、持論をもち出して、この合作社を結成するに際しては、利をもつて郷下の人を誘うことはしないといひ、「非営利」の原則に違反できない、と主張する。そこから、かれの独自の論理が展開されることになる。

将来合作の範囲が拡大し、紡績工場を開設する者は主に自己のために享用し、余りは販売に出して、商業利潤に取り替えることになる。もしも合作範囲がさらに拡大すれば、消費のために生産することができ、織布はすべて自ら享用して売って営利とすることはない。

このように述べるとともに、「営利と合作はちょうど反比例する」ととらえて「合作が高くなればなるほど、営利は低くなり」それによって「最後に資本主義が完全に消え去る」というのである。^⑯またかれは農民に対して、

金を貸すときにまた合作社が保証をすれば、必ず生産事業上で、投資を再び回収することができ、利息もまた収めることができ、ゆえに農民銀行はまたやや厚い利息を得て、自然に再投資を願うことになるに違いない。

と述べ、そのことが平均的な発達を可能にし、「個人資本主義の出現」を防止する、と主張する。かれは「非営利」の実現のために個人が利益を求める「資本主義」を防止せんとする一方で、合作社を通してとはいへ、金融関係の資本家が利潤を得、それを再投資して富を増殖することは是認しているのである。またかれは、

現在われわれの棉花は各大工廠がいずれも買ってくれる。棉運合作社は、現に二〇〇ある。その他、造林、養蚕、信倉などの合作社はまた一〇〇余社ある。鄧平全県には三〇〇余の村庄があり、一つの村庄ごとにいずれも一つの合作社があるようなものだ。^⑰

と誇らしげに述べるとき、郷村という枠組みを越え、遠く離れた大都市の大工廠が棉花を購入してくれることに対して、大きな矛盾を感じていないように思われるのである。郷村という小さな枠組みの自立性を重視するならば、「農民銀行」という形式を通して農村に浸透してくる金融資本や棉花購入を通して合作社に影響を及ぼす産業資本に対して、一定の批

判的態度が必要と考えられるが、かれの著述のなかに明確な批判的表現を見いだすことはできないのである。

梁漱溟の郷村建設実践の特色を明らかにするためには、かれが好んでおこなった他の郷村建設運動に対する批判の論点を取り上げることが必要だと思われる。かれは、一九二九年に南京郊外の曉荘学校を參觀し、ついで江蘇省崑山県での中華職業教育社を中心とした郷村改進黨事業を視察した。その後、北上して河北省定県の中華平民教育促進会総会による翟城県の自治事業を視察し、これらの方法や当面の成果をふまえて、かれは自らの郷村建設のプランを練り上げていった。かれは、華洋義賑会、定県平民教育促進会、上海中華職業教育社等々といった団体が事業を興した最初の動機は、「人を救うこと、識字を提唱すること、工商業の応用人材を訓練すること、学術を研究すること、郷村の自救（あるいは自衛）」にあつて、結局はすべて自らが唱える「郷村建設に帰結」する、と主張している。

梁漱溟は、その定県から鄒平における実験に参加して来た友人が、村学・郷学の組織を高く評価したことを取り上げる。かれはまた、われわれの郷学は普通の学校教育と社会教育を併せたものといい、南方の郷村改進黨は郷村領袖の聯絡を重視し、定県の平民教育促進会は青年農民を重視したが、われわれの郷学の方法は郷村領袖に着眼するが、あわせて一般の郷村の男女老幼大衆にも及ぶ、と述べている。鄒平の実験は、郷村の有力者だけでなく、あらゆる階層を対象に行っていると誇っているのである。定県実験のなかで重要な意味をもつ平民学校に入学してきた者はすべて若者で、九カ月の学習の後、かれらは同学会を組織したが、それは日本の青年団と同様のものであった。定県における多くの事業をかれら若者が推進した。しかし、年長者を排除したことによって「社会のたいへん多くの反感を惹起し、現在では停頓状態とならざるをえず、再び前進することはなくなっている」という現実が生まれたのである。定県の土地所有状況は鄒平と似ており、外部の人間は山東郷村建設研究院と定県は同様の工作をしているとみており、梁自身も実際の工作では近接しているところが多いことは認めている。またかれは、定県の指導者である晏陽初が郷村建設の重要性を理解していること、定県の公民教育が団体組織の形成にとって意味があること、定県の社会調査の工作はもっとも価値あるものであることなどを評価

し、定県の「導生制」を取り入れて、鄒平の第十一郷学で試行しているのである。^④しかしながら、梁は定県の実験について「定県の人は決して歓迎しなかった」という結論を出し、その眼は鄒平と定県との違いを明らかにすることに向けられている。梁は、定県の平民教育工作、燕京大学や金陵大学の郷村研究はいずれも外国の資金に頼っていると、受け入れる場合に必要なのは、農民の自覚であり、郷村の組織があつてこそ、外国人の援助を生かすことができるのである。^⑤かれは、鄒平の実験も政府の援助を受けていることは認めつつも、鄒平の如く郷村のすべての住民の自覚を促して、郷村の組織化を進めることがその前提と考えるのである。

陶行知が指導した南京郊外の曉荘学校に対して、梁漱溟はその実験が教育の道理に合ひ、農村問題を重視している、と評価する。また梁は、曉荘学校には校役が存在せず、どのようなことも学生と指導員が自らおこなっていることに注目する。^⑥さらに曉荘学校における「当日工作表」や学校と農村を結びつける医院の存在を価値あるものとしている。陶行知は、学生に対して農民と共に苦勞することによって、深く農民の問題を認識させようとしたが、このようにして育成された学生の良いところは、勞作の能力、知能面での能力、団体社会生活をする能力といった能力をもち、合理的な生活ができることだ、と梁は認めている。現実には鄒平での工作において、かれは陶行知の弟子である潘一塵、張宗麟、楊效春を派遣してもらい、^⑦第十二郷では「小先生制」を試行しているのである。^⑧だが、梁は陶行知の実践を全面的に評価していたわけではない。「曉荘学校のやり方には、できないこと、あるいは学ぶことのできないことがある」として、「学生は毎日田へ行って農作業をしているが、われわれはできない。かれらは郷村教育をやっているが、われわれはそうではない」と述べる。また師範教育に偏った曉荘学校の規模が小さいのに対して、「われわれの学校は大きく、学生も七、八倍で、当然たいへん多くの方法があり、かれらにとつて都合がよくても、われわれには適用できない」として、鄒平は全県規模の実験であつて、規模が小さいがゆえに可能な曉荘と同様な実験をおこなう気持ちがないことを言明する。さらにかれは、「曉荘の師生のように共同で立法し、共同で法を守ることは必ずしもすべて正しいとはいえない」として、師弟関係の伝統的とも

いえる原則を強調しているが、これは梁の面目がよく現れているところであろう。

中華職業教育社を中心として推進された徐公橋郷村改進区の実験に対する梁漱溟の見方は厳しい。まず参加した農民が少ないことを取り上げ、区域内の農家戸数の一〇分の一にも及ばない参加しか実現できなかったのは、「ただ領袖を仲間に引き入れただけで、農民を軽視しているから」と批判する^{④⑦}。ついでその方法について、「人は外より招き、かれの生活費は外よりの補助金であり、辦公所は外よりの補助金で修築され、教育等のこともまた外よりの補助金でおこなわれている」と外部への依存度の高さを批判している^{④⑧}。

梁漱溟は、ここ三四十年来の中国では、学校教育の大きな弊害は、社会を離れ、社会を妨害すること無窮であることだ、と述べ、商業交易と同様に学校は商業化しており、教育に金がかかるために農民の子弟の進学は、土地を売らなければだめである^{④⑨}、と指摘している。またかれは、教科書の講授に終始し、実践を伴うことのない教育も批判する^{④⑩}。とりわけ郷村建設にも関係する農業教育には厳しい目を向けている。

新式の農業は中国では終始ただ一種の学校の講習で、数十年の久しきにわたって旧有の農業に影響することができなかった。農業学校学生は卒業してもなお役に立たない。かれはもとより郷村に行つて地を耕すことを肯んじないし、まただれもあえてかれに教えを請わないからである^{④⑪}。

と農業教育の現状を批判するが、それは中華職業教育社が職業教育を推進するなかで最も困難を感じていたところであった^{④⑫}。もともと梁は教育というものに期待せず、これを推進する気持をもっていなかったが、次第に認識を改めて教育活動に移っていくことになる^{④⑬}。かれは「われわれが今日求めている教育は、社会教育であつて、学校教育ではなく、まさに成人民衆を対象とする教育である」という一方で「社会教育と学校教育の一体化」を主張する^{④⑭}。それは言葉をかえれば、「社会の学校化」を進め、当地の全民衆を学生とすることを考えているといえよう。

梁漱溟のこの社会教育的方法を実現する手段となつたのは、鄒平県において新設された村学と郷学や蒲沢県における郷

農学校であつた。郷平における村学は郷学の下部機構であつて、そのなかに学齡児童を対象とする児童部、成人男子を対象とする成年部、婦女を対象とする婦女部をもつ。「皆が心を合わせて向上し好んで進歩をもとめる（大家齊心向上好求進歩）」という精神を發揮するために「村公所」「郷公所」とは呼ばず、「村学」「郷学」と呼んだ。一方、郷農学校は、江南一帯の郷村改進黨あるいは農村改進黨、または北方定県の平民学校に相当するもので、荷沢全県の二〇郷毎に一つずつ成立していたが、校董会、校長、教員と学生である郷民より構成され、一五〇―四〇〇戸を基本単位とすると考えていた。

梁漱溟は、村学と郷学により多く言及しているため、以下、その特色について取り上げていく。村学・郷学については、県政府との交渉や県政府委任事項の受け取りといった公務は、村理事と郷理事に担当させて、県政府と郷村との調整役の任務を負わせ、村学・郷学という学校はこうした業務に関係させず、その責任を負わせないようにした。この村学と郷学におけるさまざまな決定に際しては、梁は持論である多数決の拒否を打ち出している。

一、多数表決と中国の尚賢尊師の気風とは合わず、しかも尚賢尊師は人類社会の必要とするところで、多数表決は用いることができない。二、多数表決は権利觀念より来ており、権利觀念を發揮することは人をして分かれ争う路を歩ませることになり、この時の中国に最も必要なものは団体を結成することであるから、多数表決を用いることはできない。

とし、さらに進めて、

村学・郷学では、四権―選挙、罷免、創制、復決―をもち出さず、もし四権を提出すれば、郷村がまず混乱し、分散へと向かわざるをえない。……村学・郷学組織のなかで事務責任を負う村理事と郷理事は、もとよりまた人民の監督を受けなければならないが、直接の正面衝突は避けなければならない。……学長は一村一郷の師であり、衆人の上を超えて居り、人々の是非曲直に対して、自ずから公道を主張し、理事はその監督教訓を自らまた楽しんでうける。―郷村政治の運用の、その妙は完全にここに在る。

として、かれの理想とする平和な郷村世界建設の牽引車としての村学・郷学に期待するのである。

梁漱溟は、この村学・郷学の教員に対して、全村の人々を教育の対象とし、社会工作を推進することをもって主とする

ことを期待し、日常活動の重点を以下のように説いている。^⑧

(1) 常に村の人々と面談し、いつでも親しみのもてる話をし、どこでもその教育に尽力する。

(2) 実際の社会活動を重視し、ひとつの予定の目標に向かって進行させる。

(3) さらに大切なことは、全村の人々を吸引して村学に喜んで来て話をさせるようにすること。

だが、かれは前述の自らの見解とは矛盾することを主張する。すなわち村学・郷学の教員に実際問題を上級機関に送達する責任を負わせ、「左右に聯絡があり、上下が系統をなして、全国文化改造運動の大きな体系の中の一分子」となし、県政府や研究院という「後方大本营」の指図を受ける「前線の士兵」としての役割を期待したのであった。しかし、これは郷村の自治を大きく制約するであろう。またかれは、

必ず村学・郷学というこの下層組織により、内地の郷村社会をして外の世界と氣息を通じれば「研究し改良してきた方法が」成るのである。村学は郷学に通じ、郷学は県政府に通じ、県政府は研究院に通じ、研究院は中央農業試験所に通じ、中央農業試験所はさらに再び外国に通じることができ、このようにして成るのである。^⑨

と述べ、研究と改良に関わる作業に関しては、外国にも通じることを可とするのである。にもかかわらず、梁は「郷学と村学は、自家の錢を使い、自家の人を用い、自家のことをし、設備は皆が公有し、皆が享用することができ、処処にいずれもそれが郷村組織であることを表示した^⑩」として、村学・郷学はあくまでも郷村自身が育て、維持すべき組織であることを強調する。そのため村学と郷学の教員の給与は、一年間は県費で負担するが、その後は地元が負担することになる。^⑪

また地元の意向を汲み取るために村学の学董会を設け、学董に相当する人物の選出については、教員が日常の村民との交わりのなかで適任者を内定しておき、村民大会で皆の同意を求めるとよく、その際には「決して挙手投票の表決をしてはならない」と説いている。^⑫

梁漱溟は、国民政府の支配体制とは分離された郷村自治体制の軸として村学・郷学を考え、これを指導する学長は、県

政に関わる村理事・郷理事とは別個の存在と考えた。そして、これらの社会教育機関を通して郷民を教化する重責を担う教員には、献身的な姿勢を求めた。またこれらの組織を、郷村自らが維持・発展させることを期待している。明らかに矛盾を内包した梁の郷村建設理論は、こうした機関を通して実践されることになるが、その結果はいかなるものであったのか。郷平実験の現実に照らしつつ検証していきたい。

- ① 梁「東西文化及其哲学」『全集』一―三二頁。
- ② 同前、三九二頁。
- ③ 梁「朝話」『全集』二―一〇一―一〇二頁。
- ④ 梁「郷村建設旨趣」『全集』五―五七九頁。
- ⑤ 梁「郷村青年の訓練問題」『全集』五―五六七頁。
- ⑥ 梁「答郷村建設批判」『全集』二―六〇二頁。
- ⑦ 梁「往都市去還是到郷村來」『全集』五―六三八―六三九頁。
- ⑧ 同前、六四一―六四二頁。
- ⑨ 梁「郷村建設理論提綱初稿」『全集』五―一〇四三頁。
- ⑩ 梁「促興農業的辦法」『全集』五―六四九頁。
- ⑪ 梁「中国合作運動之路向」『全集』五―一六七頁。
- ⑫ 梁「郷村建設与合作」『全集』五―九四五頁。
- ⑬ 同註⑪、六一七頁。
- ⑭ 梁「略述郷村運動要旨」『全集』五―九六四頁。
- ⑮ 同註⑨、一〇四四頁。梁にとつては、農業が工業の牽引車となるべきで、商業が工業を牽引することには反対する、とも述べている（中国経済建設的路線」『全集』五―九八五頁）。
- ⑯ 梁「郷村建設理論」『全集』二―一五七頁。
- ⑰ 同前、四九七頁。
- ⑱ 同前、四三〇頁。
- ⑲ 同前、四三二―四三三頁。
- ⑳ 同前、五二四頁。
- ㉑ 同註⑨、一〇四三頁。
- ㉒ 同註⑩、四二五頁。
- ㉓ 同註⑪、六一八頁。
- ㉔ 同註⑩、六五一頁。
- ㉕ 梁「我們在山東的工作」『全集』五―一〇三二頁。
- ㉖ 梁「自述」『全集』二―三四頁。
- ㉗ 梁「村学郷学之具体辦法」『全集』五―五四一頁。
- ㉘ 同註⑤、五六〇頁。
- ㉙ 梁「中国民衆的組織問題」『全集』五―七九七―八〇〇頁。
- ㉚ 梁「答湖北政務研究会參觀團問」『全集』五―六七九頁。梁「中国文化要義」『全集』三―一四七―一四八頁。
- ㉛ 同註⑫、三二―三三頁。
- ㉜ 同註⑫、一〇一一頁。
- ㉝ 梁「社会教育与郷村建設之合流」『全集』五―四三三頁。
- ㉞ 梁「郷村工作中一個待研究待實驗的問題」『全集』五―七五八頁。
- ㉟ 梁「北游所見記略」『全集』四―八八五頁。
- ㊱ 梁「一年来的山東工作」『全集』五―七七六頁。導生制は、後述の小先生制と同じく、文字を知っている児童が非識字の児童や大人に教

える方法である。

- ③⑦ 梁「我們的兩大難処」『全集』二一三七五頁。
- ③⑧ 梁「郷村建設大意」『全集』一一六二一頁。
- ③⑨ 梁「中国農村運動的異同及今後中国郷村建設之動向」『全集』五一九二〇頁。
- ④① 梁「抱歎—苦痛—一件有興味的事」『全集』四一八三九一八四〇頁。
- ④② 同前、八四二一八四三頁。曉莊学校には二人の労働者がおり、そのうちの一人が学校から約一五キロ離れた城内に行つて手紙を出したり、買い物をおこなつたりしており、もう一人が学生の耕し残した田地を耕し、その待遇や地位は指導員、学生と同等であつて、校役は事実上存在しない、と梁は認めている。
- ④③ 同前、八四四一八四五頁。
- ④④ 前掲「梁漱溟先生年譜」六六頁。
- ④⑤ 同註②⑥、七七六頁。
- ④⑥ 梁「今後一中改造之方向」『全集』五一八六一頁。
- ④⑦ 同前、八六四頁。
- ④⑧ 同註①⑥、三四八頁。
- ④⑨ 同註③⑤、八七七頁。
- ④⑩ 梁「社会本位的教育系統草案」『全集』五一四〇七頁。
- ⑤① 同註④⑩、八三八頁。
- ⑤② 同註①⑥、四二〇頁。
- ⑤③ 同註④⑤、八六二、八六五頁。
- ⑤④ 同註③⑤、八七六頁。
- ⑤⑤ 拙稿「黄炎培と職業教育運動」『東洋史研究』第三九卷第四号、一九八一年。
- ⑤⑥ 梁「研究“郷村建設”的途径」『全集』五一五二一頁。
- ⑤⑦ 梁「中国今日需要哪一种教育？」『全集』五一九六七頁。
- ⑤⑧ 梁「郷農学校の辦法及其意義」『全集』五一三四七頁。
- ⑤⑨ 同註⑥、六五三頁。
- ⑥① 同註⑤⑦、三四七頁。
- ⑥② 同註①⑥、三四六一三四七頁。
- ⑥③ 同註③⑧、六九一—六九六頁。
- ⑥④ 同前、六九八頁。
- ⑥⑤ 梁「我的一段心事」『全集』五一五三五頁。
- ⑥⑥ 同註③⑧、六八〇—六八一頁。
- ⑥⑦ 同註⑥、六五四頁。
- ⑥⑧ 同註⑤⑦、三五二頁。
- ⑥⑨ 同註③⑧、七一六頁。
- ⑦① 同前、六六八頁。
- ⑦② 梁「山東郷村建設研究院泉政建設実験区鄒平県実験計画」『全集』五一三八二—三八四頁。
- ⑦③ 同註②⑦、五四五頁。

三 郷村建設の実態と意義

梁漱溟は、父梁濟（字は百川）の方針に従つて中西小学堂に入学して英文を学んだが、四書・五経等は読まなかつたと

いう。後に「儒教思想を擁護し、孔子を賛揚する人になった」が、「中国の重要な古籍を、わずかに娛樂本や普通雑誌を読むが如く拾い読みしたにすぎない」^①と述べている。このことは、かれに儒教がある面で客観化してとらえる姿勢をとらせることにつながったであろう。それよりも、かれの父がジェームズやジョン・デューイらのいわゆる「実用主義」（プラグマティズム）に近い考え方をもち、功利主義者であったことが大きな意味をもつ。かれは父の思想の影響を受けて実用主義者になったのである。^②この実用主義的な思考は、梁の理論のなかにしばしば姿を現すことになる。

梁漱溟は、一九三四年頃の鄒平県の土地所有状況について、大地主はきわめて少なく、一〇〇畝以上の地主もまた少なく、わずかに城北の砂地の多い地域でまさに数百畝をもつ農家がある、と述べている。この当時、長城以南では、新旧の地主の交替が目立ち、中農層が減少し、貧雇農戸数が増加するなど農民層分解が進んでいた。しかし、鄒平県では無田者も少なく、土地集中の問題は発生していなかったといわれている。^④かれは、実験の対象として郷村内の階級対立が発生しにくい地域を選んでいたのである。

一九三一年六月、山東郷村建設研究院が正式に成立した。三三年には国民政府の規定した県政建設実験区辦法により、鄒平は改めて県政建設実験区となり、その工作は地方行政や地方自治という問題にも及ぶことになった。^⑤この実験工作で成果をあげたものに農業改善事業がある。とくに美棉の改良によって、三三年に八、七四二畝であった栽培面積が、三四年には四一、二八三畝に急増し、畝当たりの収穫は二二〇斤から一四〇斤に増え、品質も従来種が二〇番手前後が紡げるだけであったが、改良種によって三六番手以上のもを紡げるようになった。棉花の集積と加工から運搬と販売までをおこなう梁鄒美棉運銷合作社は成果をあげた。^⑥この棉花の販売先には、青島華斯紗廠、濟南中棉公司等があった。^⑦その他の改善事業としては、蠶業、機織、造林の改良と合作社の組織や、豚と鶏の改良品種の普及などがあげられる。また梁の奔走によって設立された衛生院の医薬衛生事業もあげられる。こうした改善事業は、農家の収入を増やし、当地の農業技術と効率を高めるといふ成果をあげることができた。^⑧

ただし、梁鄒美棉運銷合作社の社員の持ち株は棉花の栽培面積に応じて配分されたように、資産をもつ者にとって有利な組織であったことは疑いがない^⑩。同様に鄒平で組織された信用合作社や農民金融流通処^⑪についても、貧農以下の層が対象とされたとは考えにくい^⑫。また当時から、合作の道はすでに農民をして緊密に都市の工商業家の手によって支配させることにすぎず、いかに社会の重心を農村においても、経済的、政治的、文化的中心である都市の、農村に対する搾取と支配の関係を少しも変更することはできない^⑬、との批判があった。梁漱溟を中心とした鄒平の側は、外埠の過剰資金をもつて、生産を回復し、一般の購買力を増やして、民族工業の勃興を促すことができると考え、資金の環流が金融を活発化するとして、米麦棉花を外貨に替えることが最も必要である、と主張する。きわめて楽天的な見通しであつて、例えば千家駒のいう、中国の主要産業がすべて外国人の手中に入り、民族産業のなかの棉紡織業やマッチ・タバコなどの産業に倒産が多く、それを保護すべき関税はかえつて洋品の販売に有利となつてゐる、とする指摘とはかみ合わないのである。

山東郷村建設研究院の郷村服務人員訓練部では、郷村建設の指導メンバーの育成に力を入れた。その課程のなかでは、軍事訓練の時間が多く、第一次の全年時数分配では三二二時間で全体の一八・二%と大きな比重を占めていた。入学当初よりきわめて厳格な軍事訓練をおこなつて体力を鍛練し、精神陶練を講授してその心身を陶冶し、三ヵ月を期して下郷して実習し、郷村生活を体験させるといふ方針であつた^⑭。この訓練部の課程には、党義や郷村教育、自衛研究という項目も含まれていた。その軍事訓練は郷村自衛のためにもなるもので、成人男子を対象に実施された。一九三〇年制定の山東各県聯荘会暫行章程に基づく訓練が鄒平県でも実施され、一五家を一間とし、そこから一八〜二五歳で「身家財産のある者」二名を選び、県城内で訓練をおこない、聯荘会訓練員と称し、二期で一、一七二名にのぼつた。その訓練の厳しさに、残された家族は日夜惶恐したという^⑮。こうした自衛訓練を指導する正副郷隊長は、また一方で、無業の遊民、毒品・アヘンの販売者、賭博開帳者、礼教破壊を宣伝する者など郷村秩序を混乱させる可能性のある者を報告する責任があつた^⑯。この軍事訓練は、郷村自衛という「身家財産」を有する者にとっては納得できる目的をもつだけに、地主・富農層にとつて

は必要不可欠のものであったといえよう。ただし、都市の秩序は武力によって維持されるのに対して、郷村の秩序は理性によって維持されるとして、郷村の優位を説く梁漱溟の姿勢からはかけ離れることになるが、かれはこのことを深く追求しないのである。

梁漱溟の村学・郷学についての構想はすでに述べたが、鄒平県では郷農学校が一時的に民衆学校と称した後、その不振の成績を立て直すべく、実験県政府の手によって三三年六月に村学・郷学と改名した。これは社会運動者の立場より現政権の立場を兼ね、「政教合一の原則」に依り、教育と行政を一体化し、学務学董一人を郷理事あるいは村理事として、行政面での責任を負わせ、村学・郷学を「一村一郷の政教出発の中心点」にすると唱えていた。また村学・郷学の組織原理は、社会教育、学校教育、政治訓練、生産訓練の四者を一体化したものとわれ、鄒平県の郷村自治の核心となることを期待されていた。三四年七月の段階で、鄒平県の首善郷を除く一三郷に郷学が成立した。しかし、村学は三五一村に対して五五カ所に成立と、梁が期待した成果をあげていたわけではなかった。

一九三五年一〇月の全国郷村工作討論会第三回大会での報告のなかで、梁漱溟は村学・郷学は「二年來、終始好いところがない」と判断して、村学の教員をすべて集めて一部分を選び出し、それに新規卒業の同学を加え、集中講習をおこなった後、下郷させた、と述べている。また県政府は、郷村に対して多くの事業を督促強制したため「郷学・村学は被動の機械的地位」に陥らざるをえなかった。しかも、組織が融通を欠いていて、郷学では学長・理事・輔導員がそれぞれ中心となって、まとまりがない。村学については軽視され、村学の学董会の組織は不健全で合法的とはいえない。さらに村学にやってきた農民は、話が終わると、他のことは考えず、ただ飯を食うことだけを考えていた。小範囲での郷村建設の成果を中国社会全体に及ぼさんと願う梁にとって、村学こそがその中心となるべきものであった。しかし、この村学は軽視され、農民もまたその意義を理解しようとはしないのであった。

一九三五年一〇月二五日、山東郷村建設研究院における講演のなかで、梁漱溟はそれまでの建設実験を総括して、「ま

ず第一点は社会改造を高談しても政権に依附し、第二点は郷村建設を号称しても郷村が動かなかったことである」と述べらる。無錫の郷村工作討論会でも定県の去年の年会でも、ともに郷村農民の代表はほとんどいなかった。参加者は教育界の人が最も多く、農業学者や公共衛生学者といった技術人材も多く、地方政府、中央政府の代表者も出席しているが、郷村から来た農民を代表する者は本当に珍しい。このように現状を分析した梁は、

現在われわれが動いても、かれらは動かない。はなはだしきはわれわれが動くので、かえってかれらと合わなくなり、われわれに
なすべきではないとしているようだ。これはわれわれが郷村の要求を代表していないということだ！われわれ自らはわれわれの
工作は郷村にとってよいところがあると考えているが、しかしながら郷村は決して歓迎していない。

と慨嘆する。さらに続けて、郷村建設研究院が引越さなければならなくなったが、郷民の反応は、引越すのもよし、引越さないのもよし、というものであって、これはわれわれが郷村と一体になっていないことを証明している、と語っている。

梁漱溟は、鄒平県における棉種改良の結果、優れた品質の棉種を生み出し、一九三三年に上海商品検驗局と申新紗廠の試験を受け、「国産の最優秀者」の評価を受けたことを述べるとともに、上海紡廠および銀行界がこの棉種を重視し、援助をすることを考えているが、これは前途に希望のある工作である、と述べている。ここではかれの嫌う産業資本との結びつきについては問題としていないし、経済活動を小規模な範囲に限定したいとする、かれ独自の姿勢もみられない。梁には経済学に対する認識に欠けるとの評があり、実際に「社会本位ではなく倫理本位の経済」と説くかれの経済理論は、競争原理が支配する当時の社会にあつては、一つの主観的願望を説いたにすぎないともいえるだろう。「工業化」を是認する梁の説く「中国の家長制の倫理本位の社会はちょうど中国の工業化を阻害する重要な原因の一つ」という李紫翔の批判の方が説得力をもつのである。

山東郷村建設研究院の訓練部の課程には、党義の研究、郷村服務人材の養成、村民自衛の常識と技能の訓練、郷村経済

方面の問題研究、郷村政治方面の研究という項目があった。この訓練は、一年間、夏休み、冬休み、日曜日、記念日なしという厳しいスケジュールでおこなわれた。^③ 梁漱溟自身も多日には六時間の授業をし、放課後には院務の処理をした。^④ この訓練部の卒業生は七〇〇人を越えたが、期間が短いため、奉仕精神の陶冶や技術能力の養成は、ごく少数を除いて、期待した結果は得られなかった。それは自由に実験ができないことと、実験費がないためであった。^⑤ 「第二省政府」と称せられた研究院^⑥にしても、活動の制約が大きかったのである。とくに経費面での制約を解消するため、国民政府との協調関係は欠かせないものであった。^⑦ それでも梁は、郷公所と区公所を郷学と村学に改めるといふ形の郷村行政を構想した。それはわずかに名称上の差にすぎないとの指摘もあるが、かれが国民政府とは一線を画さんとした独自性の表現とみるべきであろう。

梁漱溟の理想は「政」「教」「富」「衛」の合一であった。^⑧ このうち政教合一は、村学・郷学などによる行政機関の教育機関化で表現されるであろう。「富」は、農業改善事業や合作社の設立などによる富裕化として理解できるだろう。かれは「寡きを憂えずして、均しからざるを憂ふ」と古語にいうが、その実均しからざるはまさに寡より来ている^⑨ という。まさに貧富の差や階級——梁は中国におけるその存在を否定するが——の差を内に含みつつも全体として富裕化へと進むことが、「均しさ」を生む源となると考えているのである。それが「寡」を均等に分けんとするように思われる共産党路線への反発にもつながっているのである。梁が「非営利」を強調するのは、富裕化が実現していく過程でさらに貧富の差が拡大していくことを警戒するためだったと考えられる。「衛」は、「民衆武力」を養成して郷村自衛をおこなうことであり、国家有事の際には国軍の後盾となることも考えていたと思われる、それは後に現実化されるのである。

鄒平実験は、郷村建設運動としては後発であったが、梁漱溟は一九三三年七月、郷村工作討論会第一次会議を鄒平で挙行し、郷村建設運動の指導者としての地位を築くことになる。かれは、他の郷村建設運動に対する自らの理論と実践の優位を確保すべく、他の運動に対する批判を繰り返した。その概要はすでに明らかにしたが、はたして梁の主張が是認でき

るものであっただろうか。

中華平民教育促進会総会の定県実験に関しては、若者を中心に郷村改進を進めたことが、郷村民全体の反発を招いたことを批判する。しかし、農業分野に新たな科学的方法を導入するのに「年齢と徳行ともに優れた」長老がはたして率先垂範するであろうか。やはり青年層に新技術導入を期待するしかないであろう。定県は識字教育で成果をあげた。^⑪一方、梁漱溟は識字教育などの基礎教育を軽視したといわれる。^⑫青少年に基礎教育を施してこそ、科学技術を農業に導入する可能性が生まれるのに、梁はそのことを理解しようとはしなかったのである。

陶行知の曉莊実験に対して、梁漱溟は規模の違いから同列に論じようとはせず、師弟関係の原則にこだわって、その方法の導入には否定的であった。この曉莊より鄒平に派遣してもらった張宗麟と梁は、当初「生活即教育、社会即学校」「教学做合一」の陶行知理論に基づく教育改革を実施することで統一歩調をとったが、その後、梅津・何応欽協定反対運動をめぐって対立し、張は辞職した。^⑬陶行知の提唱した「小先生制」運動は全国に影響を及ぼしたが、^⑭鄒平実験における教育的成果は広範に受け入れられるものとはならなかった。

中華職業教育社の郷村建設に対しては、参加農民の比率の低さと外部への依存度の高さを批判する。この梁漱溟の批判は、とくに全郷村民をあげての運動を組織できなかったという点では当たっているが、外部資金への依存度という点では鄒平側も同様の水準なのである。^⑮また郷村改進の具体的な事業展開という面では、職業教育のノウハウをもつ中華職業教育社の方が、鄒平県よりもきめ細かく推進していたと考えられる。^⑯

山西省の村政に対しても、その新政を評価しつつ、人民が被動的地位にあることが弊害を生む、と批判しているが、それはそのまま梁漱溟に対して投げ返される批判であるだろう。山東郷村建設研究院のなかで、理論素養と研究心得をもつ指導的人物は、梁以外にはほとんどいないといわれた。^⑰また鄒平実験県長徐樹人は、梁の問題認識の部分を聞いただけで、問題解決の部分を聞いていないので、一連の実験計画を出せない、と述べている。側近といえども梁の真の意図を理解で

きなかつたのである。いわんや一般の農民は、運動が直接的利益をもたらす限りではそれを歓迎するが、かれらを拘束し、負担を強いることになるかと反発を強めていくことになるであらう。

一九三七年一〇月、日本軍が山東省の境界に進出し、山東省政府主席韓復榘は退却の意志を固めた。梁漱溟は、一〇月三〇日に韓と最後の会見をし、退却を思いとどまるように説得したが、受け入れられなかった。同年一二月下旬、かれは同人らと山東省より撤退し、鄒平の実験工作に終止符が打たれた。しかし、梁は「抗戦の名義」を要求し、「中央直屬第三政治大隊」の名義を与えられ、翌三八年には山東省に戻って抗日闘争に加わるうとしている⁵¹。この抗日の戦いのなかで、郷村自衛のための訓練を受けた農民たちが早くから活動していたのである⁵²。

① 梁「自述」【全集】二二―二五頁。

② 同前、五―六頁。

③ 梁「就鄒平土地状況復許仕廉函」【全集】五一―四二七頁。梁「鄒平郷村建設一般」【全集】五一―四七三頁。なお吳頤毓「鄒平実験県戸口調査報告」中華書局、一九三七年、一三九頁、によれば、三五年の調査による鄒平県の本籍戸三二、一五四戸のなかで一〇〇畝以上を所有するのは一・〇五%の三三七戸にとどまっていた。これを五〇畝以上とすると、五・三三%の一、七二二戸となる。また土地を所有しない者は、七・八九%の二、五四〇戸であった。

④ 金德群「民国時期農村土地問題」紅旗出版社、一九九四年、一四八―一五七頁。吳頤毓前掲書、六三三頁。

⑤ 山東郷村建設研究院編印「山東郷村建設研究院及鄒平実験区概況」一九三六年、七頁。

⑥ 同前、四六頁。なお「梁郷」とは鄒平の古称である。

⑦ 許蓋漣・李鏡西・段維李編「全国郷村建設運動概況」山東郷村建設研究院、一九三五年、第一輯、一三三頁。

⑧ 同前、一三三頁。

⑨ 周陽山「伝統与現代間的扶掖」(梁培寬編「梁漱溟先生紀念文集」中国工人出版社、一九九三年、二七六頁)。

⑩ 同註⑦、一一九頁。

⑪ 菊池貴晴「梁漱溟と郷村建設運動をめぐる諸問題」『中国第三勢力史論』汲古書院、一九八七年、二〇六頁。

⑫ 農民金融流通処は、農民銀行の性質をもち、利息は月に八厘から一分で比較的軽いといわれた(同註⑦、二七二頁)。

⑬ 同註⑩、二〇九―二一〇頁。

⑭ 李紫翔「郷村建設」運動的評價(千家駒・李紫翔編著「中国郷村建設批判」新知書店、一九三六年、一六三―一六四頁)。

⑮ 同註⑦、二九―三〇頁。

⑯ 千家駒「中国的歧路」(前掲「中国郷村建設批判」一四五頁)。

⑰ 同註⑦、八五―八七頁。

⑱ 同前、二五八頁。

⑲ 同前、二五三―二五四頁。こうした軍事訓練は、一九三五年七月か

- ら翌年六月まで、全県の成人軍事訓練を受けた者が、八、三、五三名に達するなど一貫して続けられた（同註⑤、九六頁）。
- ②⑩ 梁「郷村建設理論」【全集】二二二一—二二六頁。
- ②⑪ 同註⑦、二二二頁。
- ②⑫ 同前、二二三—二三四頁。
- ②⑬ 梁「二年来的山東工作」【全集】五〇七七—五〇七七頁。
- ②⑭ 梁「村学郷学的具体辦法」【全集】五〇五四—五〇五二頁。なお輔導員とは、その多くが研究院で訓練や講習を受け、県政府を代表して、郷村にやってきた者である。
- ②⑮ 梁「村学的做法」【全集】五〇七三—五〇七三頁。
- ②⑯ 梁「我們的兩大難處」【全集】二二五七—二二五七頁。
- ②⑰ 同前、五七四—五七五頁。しかしながら、梁は風俗習慣の是正には関心をもち、男子の結婚年齢が早く、女子は先買婚に近いとして改善を求めた。なお鄒平県での結婚年齢は、男子で最も早いのが六歳、最も多いのが一五歳に対して、女子は最も早いのが九歳、最も多いのが一七歳、と三五年の戸口調査は伝えている（吳顯毓前掲書、六三四頁）。さらにかれば、出産に際しての子供の死亡率が高く、満一歳までに五〇%以上が死亡する現状を憂えて、出産に関する衛生指導をおこなわせて、死亡率を一〇%未満に引き下げたと報告している（梁「我們在山東的工作」【全集】五一〇二—五一〇二頁）。その他に、定県の「導生制」や曉荘の「小先生制」の導入による教育普及の試みも成果を上げ、導生制共学処と称する教育機関は、一九三六年三月段階で二六二カ所、収容された失学児童は二、三二七人となっている（同註⑤、一〇一頁。同註⑦、二二六頁）。
- ②⑱ 梁「山東郷村建設研究院最近工作概述」【全集】五一四九—五一五〇頁。
- ②⑲ 梁「鄒平郷村建設一般」【全集】五一四七—五一四五頁。
- ③① 林瑞明「梁漱溟的思想与行動」（前掲「梁漱溟先生紀念文集」二五八頁）。
- ③② 同註⑩、一六九頁。
- ③③ 李紫翔前掲論文（前掲「中国郷村建設批判」一六三頁）。
- ③④ 梁「山東郷村建設研究院設立旨趣及辦法概要」【全集】五一—五五—三三六頁。
- ③⑤ 朱秉国「鄒平憶憶」（前掲「梁漱溟先生紀念文集」五一頁）。
- ③⑥ 梁「山東郷村建設研究院工作報告」【全集】五〇三—五〇三頁。
- ③⑦ 千家駒「悼念梁漱溟先生」（前掲「梁漱溟先生紀念文集」一三六頁）。
- ③⑧ 梁は「国民党の指導する国民革命は、階級闘争ではなく、全民闘争である」（「北游所見記略」【全集】四一八—四一八頁）と国民党を評価しているが、あくまでもかれ独自の論理に適合していることがその評価の根拠となっている。
- ③⑨ 千家駒註⑩論文（前掲「中国郷村建設批判」一三五頁）。
- ③⑩ 梁「山東郷村建設研究院及鄒平実験県工作報告」【全集】五一—五八—二頁。
- ④① 梁「答郷村建設批判」【全集】二二—二二—四頁。
- ④② 拙著「平民教育運動小史」（京都大学人文科学研究所共同研究报告「五四運動の研究」第三函、同朋舎出版、一九八五年）第三章、参照。この定県の実験は、多数の郷村建設運動のなかでも最も長く続き、影響も大きかったといわれる（宋思榮・熊賢君「晏陽初教育思想研究」遼寧教育出版社、一九九四年、一〇三頁）。
- ④③ 馬勇「梁漱溟教育思想研究」遼寧教育出版社、一九九四年、一九八頁。
- ④④ 同前、二六六—二六八頁。
- ④⑤ 同註④拙著、第四章。

- ④ 山東鄉村建設研究院の予算は、一九三三年がピークで二二〇、九〇〇元になっているが（同註⑤、一五―一七頁）、中華職業教育社の徐公橋鄉村改進区の同年の支出は二五、五〇〇元である（同註⑦、四三―四四頁）。
- ⑤ 拙稿「鄉村建設運動と中華職業教育社」『明石短期大学研究紀要』第一号、一九八二年。

おわりに

梁漱溟は、妻の黃靖賢より尊大で自信過剰であることを戒められたが、自ら障害にあたっても目が覚めず、執拗で人の話を聞かないことを認めている。^①かれの思想と実践には、その氣質がよくあらわれているといえるだろう。中国の救済を郷村の再建に求めたかれは、鄉村建設を法律や多数決原理に基づいて進めることを拒否し、優れた人物が郷村民を指導する形で進めようとした。かれは、一方で郷村民の自主性の喚起を唱えつつ、その自主性の發揮の方法には具体的に立ち入らないのである。かれは、個人主義の存在を否定し、儒教の五倫うちの「君臣の一倫」に代えて「団体と個人の間の一倫」を入れている。つまり有徳者に率いられた集団の力に期待しているのである。儒教的倫理を信奉しつつ、ある面では客観化し、装いを新たにしたいともいえよう。「両湖・広東・江西その他各省の焚殺の惨」の原因を共產党に帰し、郷村内に階級的対立をもち込もうとするその姿勢に反発する。この姿勢は武力闘争を否定する平和主義にも通ずるもので、帝國主義の侵略に対する武力抵抗の否定という当初の主張にもつながっている。「階級」なき郷村の建設をめざした梁にとつて、山東省鄒平県の土地所有形態は、上下の格差が小さくて、理想的であったともいえよう。かれなりの現状分析により、そのことを実験の着手段階から認識していた。

梁漱溟は、郷村本位主義とでも称すべき立場から、都市の發展が郷村に及ぼす悪影響を憂慮した。郷村を豊かにするに

- ④ 梁「北游所見記略」『全集』四一九〇四頁。
- ⑤ 馬有前掲書、二三四頁。
- ⑥ 同前、二四二頁。
- ⑦ 梁「告山東鄉村工作同人同學書」『全集』六一七頁。
- ⑧ 前掲「梁漱溟先生年譜」一一〇―一一二頁。
- ⑨ 家近前掲論文。

は、科学的方法に基づく農業改善が必要であり、農業が工業を引つ張る形での工業化も必要である。そのことをかれは認めつつ、「個人資本主義」や「産業利潤」を否定し、「非営利」や「消費のための生産」を唱える。また「営利と合作は反比例する」として、各種合作社の設立による郷村全体の富裕化をめざすのである。しかし、小範囲の経済活動を理想とするかれが、鄒平産の改良型棉花を購買する産業資本を歓迎し、上海の銀行資本などの浸透も認めた。かれの経済理論は、主観的願望を織り込んだ理論とはいえない理論であった。ただし棉種改良や各種合作社の成功によって、小地主や富農層を中心とした郷村民が潤うことになって、郷村に活力が戻り、その理論的な誤りは大きく取り上げられることはなかったであろう。

村公所と郷公所にかわる村学と郷学は、少しでも郷村民の自主性を確保せんとした梁漱溟の苦肉の策であったが、とくに村学の不振はかれの期待を裏切ることになった。学長や学董の役割も名目的なものたらざるをえず、村学教員の再訓練も必要であった。行政に関わる村理事・郷理事はともかく、学長の任務はきわめて曖昧なものであっただろうし、そこに適格な人材を得るとは限らなかつた。何よりも対立を嫌う梁は、チェックとバランスの必要を説きつつ、そのチェック機能を制度として導入することを否定しているのである。かれは、武力行使を嫌い、上からの指令を嫌ったが、上からの命令で持続された郷村自衛のための軍事訓練は否定せず、これは訓練部の主要な任務ともなっているのである。さらに皮肉なことに、この訓練は防災面で役に立ち、抗日戦争でも早期の対応を可能としたのであった。また一方で、教育面での指導の中核と頼んだ張宗麟や甥の梁君大も、梁漱溟と相容れず、その下から離れていった。結果として、その理論を理解し、実践する有為の人材が生まれてこなかつたのである。

薛暮橋が「こうした郷村改良主義の団体は、何千何万の良心をもつ青年を有し、かれらは主観的には郷村の改造、中国の改造を企図している」^④と述べ、千家駒が「私が批判するのは郷村建設運動の全体の社会哲学であって、『至民間去（人民の中へ）』は深く尊敬する」^⑤と語るように、梁漱溟らの実践への情熱は高く評価されなければならない。しかし、その成

果はかれの本来の意図から離れたところで生まれているのである。われわれの工作を郷村は決して歓迎していない、とする梁の述懐は、そのことを端的に物語っているであろう。

結局、梁漱溟が政治権力を排除した形で郷村建設を進めようとしたのは、南京国民政府と一線を画したいとするかれの意図を示すものであったといえよう。しかし、国共両勢力の間に第三勢力の道を開こうとしたかれの願望は、理論の矛盾や現実との乖離、経済的基盤の欠如などのために挫折せざるをえなかった。本稿は、従来の研究で国民党寄りとみなされてきた梁の運動が、最終的に妥協を余儀なくされたとはいえ、第三の道を志向していたことを明らかにするとともに、第三勢力の研究にも新たな視角を提供しえたと考えている。

① 梁「悼亡室黃靖賢夫人」〔全集〕五―七五三頁。

② 渭沢県の郷農学校では、郷村自衛の軍事訓練の他に四カ月の民衆教育をおこなったが、これを生かして黄河決壊の際の築堤などを農民を組織しておこない、損害調査や被災者に対する救護活動もおこなっている（梁「鄆平郷村建設一般」〔全集〕五―四七六―四七七頁）。

③ 梁君大は、小学校長として男女同学など先進的な改革をおこなった

（馬勇前掲書、二六九頁）。

④ 魯振祥前掲論文。

⑤ 千家駒「中国的岐路」〔前掲〕中国郷村建設批判〕二二八頁）。

（神戸女子大学文学部助教）

Liang Shu-ming(梁漱溟)'s theory
in the movement of village construction

by

KOBAYASHI Yoshifumi

Liang Shu-ming directed the movement of village construction in Qu-ping country (鄒平縣), Shan dong province (山東省), in the early 1930s. This movement recommended a radical method to provide relief to impoverished China. Virtuous members of a village community carried out undertakings towards life improvement, improvement of agricultural skills, and the foundation of a co-operative society, by peaceful methods. This method would bring about prosperity for all village people. The basis of Liang's methodology and beliefs was that, the order of a village would be sustained by the moral principles of the group members rather than by law or by majority decisions. It would show respect to people's own initiatives. These villages could further the Chinese industrialization, and produce for consumption, but this progress was capitalism for personal profit. However, contrary to Liang's intentions, the villages introduced external capital and imposed military training on the village people by order of the provincial local government. Liang expected village and country schools to be educational institutions of the people, but these educational institutions did not work effectively. There was obvious disagreement between his theory and the reality.